

福井県文書館講演

## 松平春嶽と明治維新

佐々木 克

福井県文書館講演

## 松平春嶽と明治維新

佐々木 克\*

はじめに

1. 四賢侯（島津久光、伊達宗城、山内容堂、松平春嶽）の登場
2. 元治国是会議（朝議）に出席
3. 長州征討勅許をめぐる
4. 兵庫開港をめぐる朝議に参加
5. 王政復古政府（新政府創設）の成立

はじめに

こんにちは。十年ぶりぐらいに福井に参りまして、駅前に降りてびっくりしました。まったく昔の福井駅と違って知らないで突然来たら迷子になるどころでした。もう少し雪があるかと思って来たのですが、全く雪がなく、僕は秋田で生まれ育ったので、冬は雪がある方がほっとするのですが、とうとう地球が暖かくなってしまっている。そういうふう実感しました。

それでは今日は「松平春嶽と明治維新」というテーマで、特に幕末の文久年間以降、幕末のクライマックスの段階で、春嶽がどういう行為・発言をしたのか、そういう点を少し詳しく見ていきたいと思います。最初にお伝えしておきたいのは、私の幕末政治史の理解は、みなさん御承知の幕末とはかなり違ったとらえ方をしております。長く大学で研究してきた結果として史料を丁寧に見ていくと、討幕運動というのは、これは嘘だと。簡単にいいますと、現在われわれが見られるあらゆる史料、薩摩などにある史料をどんなに見ても、薩摩藩が「討幕」をする、すなわちごんべんの「討つ」ほうの討幕というのは、武力でもって慶喜を殺す・滅ぼす、幕府を滅ぼす、そういう過激な意味なのですが、そういうことをするとは薩摩の側の史料のどこを探しても出てこないのです。それから長州藩もそうです、長州藩の首脳部の発言を記録したものからも、自分たちが討幕運動をするという、そういう史料は見いだせません。

これは戦前の文部省の見解で、『維新史』という全5冊の幕末史の本があるのですが、そこで薩長討幕派とする文部省の見解を打ち出している。それがいまだに我々研究者をふくめてとりこにしている、がんじがらめにしている、そういうことです。当時「討幕論」というものはあったと思います。あったからこそ薩摩藩は、西郷隆盛、そして藩主の言葉として残っていますけれども、我々は討幕はしない、と言っている。「しない」と言っているけど「する」とは言っていない。これはたぶんみな

---

\*奈良大学文学部教授、京都大学名誉教授

さんショッキングな発言として受け止められる方もいるかと思いますが、これが事実だということです。そうすると、こういう討幕論、幕末の政治の流れが薩長中心の討幕派の運動という理解で見えようと、全く春嶽の立場がなくなってしまうのです。

実はこれからお話ししますが、春嶽は最後の王政復古の段階、あるいは鳥羽伏見の段階でも薩摩と一緒に行動しています。まあべつたりではありませんし、意見の対立はありますが、協力して行動します。松平春嶽はどちらかというと、何とか幕府に立ち直ってもらいたいという、そういう立場の人間です。しかも越前松平家は徳川親藩で、幕府にとっては頼りになる藩。そういう立場から何とか幕府に立ち直ってもらいたい、そういう立場でもって、しかし新しい国家を作るためには薩摩と協力して、喧嘩しないで、とにかくここは協力して新しい国家・新しい政府を作って日本を立ち直らせなければならない。そういう意識のもとで行動しております。ですから、薩長討幕派に対する幕府側・幕府を支持する立場の春嶽であると、幕末の政治の流れを討幕派運動との視点でみてしまうと、全く対立したイメージしかわいてこないのです。しかし実態はこれから順次にお話していきますけれども、薩摩と春嶽は、まさに一緒に行動しております。その点をこれから少し詳しく見ていきたいと思います。それでは本題に入っていきます。

#### 1. 四賢侯（島津久光、伊達宗城、山内容堂、春嶽）の登場

「四賢侯」、四人の賢い大名クラスの人物ということですが、ここにあがってくるのは薩摩の島津久光・宇和島の伊達宗城、それから土佐の山内容堂と松平春嶽。この四人がだいたい文久期あたりから四賢侯という評判になるのです。日本の国家の将来について発言し、実行力がある、そういうふうに見られております。彼らが登場してくるところから入っていききたいと思います。

春嶽は御承知のように安政5年（1858）に、日本がアメリカと最初に通商条約を結んだ年ですけれども、例の大老井伊直弼と対立して、隠居させられます。それから4年たってようやくこの文久2年（1862）7月9日に、34歳で隠居の身から政治の場に復帰・復活したわけです。同時に政事総裁職という幕府の新しく作られたポストに就任いたします。さらに7月6日には慶喜が25歳で將軍後見職に就任する。そして7月23日と8月19日に江戸の越前藩邸で春嶽と慶喜、そして島津久光、このとき45歳ですが、会談をして幕政改革・朝廷改革について相談いたします。久光は薩摩藩主ではありませんが、久光の子どもが藩主です。しかし実質的に薩摩藩を代表する人間として認められております。久光自身も大名の格式で行動をしておりますので、まあ世間の目も幕府側も事実上の藩主だという見方をしております。そして同時にこの時点から、この後もずっと伊達宗城、山内容堂の4人の連携が深まっていきます。

この4人は簡単に言うと一橋派の人間であります。久光は直接將軍継嗣問題で慶喜を擁立しようとして動いていませんが、久光のお兄さんで薩摩藩主であった島津斉彬が、春嶽や宗城・容堂と一緒に運動しているわけです。そしてそこに慶喜も加わって、言ってみれば一つの政治勢力のような形で、4人がこの文久期に登場してきたというわけです。彼ら4人と慶喜は開明派です。あるいは改革派と言ってもいいかもしれません。この4人と慶喜でもって、いわゆる幕政改革や朝廷改革をすすめていこうと、そういう相談をしているときに、政治状況ががらりと変わっていく。文久2年8月、岩倉具視に

蟄居命令が出される。なぜ蟄居命令が出されたかといいますと、和宮の降嫁など、幕府側に立って動いていた。これは特に強硬な攘夷論者が主張したものです。こういう攘夷論者が文久2年の夏ごろから急激に力を持ちだしまして、彼らが京都政局あるいは朝廷を支配する、そういう状況になってしまうのです。

そして、攘夷強硬論の人々が幕府に攘夷の実現を迫る。とにかく幕府が責任をもって攘夷を実行してほしいと、そういう行動に出ます。そうした中で、11月27日に京都から江戸に勅使が派遣されます。三条実美という朝廷内の若手の、やはり過激な攘夷論者です。彼が江戸城に登城して攘夷を実行するように要求します。この場合の攘夷は、当時の言葉でいえば「破約攘夷」です。要するに「破約」ですから条約を破棄するという事です。通商条約を破棄する、近代の言葉でいえば条約改正です。幕末には「条約改正」という言葉がありません。ですから「破約攘夷」という言葉になるのです。ところがこの破約攘夷論にも二通りありまして、過激な破約攘夷論と穏健な破約攘夷論があります。過激な方はとにかく安政5年に結んだ条約関係一切を取っ払ってしまう、破棄する、解約するべきであると強く主張します。穏健論の方は、そんなことを要求したって外国が絶対受け付けない、まず無理だと、そういう認識のもとに、特に天皇が望んでいる横浜の開港をやめて鎖港する。しかし長崎と函館では開港して通商関係は維持する、言ってみれば限定的な開港と言いますか。このようにかなりの大きな温度差があるということです。

みなさん攘夷というと、とにかく外国の勢力あるいは外国人を襲撃したり追っ払ったりするというふうに思われがちですけれども、それはごく一部の狂信的な人間の発言や行動でありまして、当時の政治の世界の争点・論点となるのは破約攘夷論、現代の言葉でいえば条約改正論です。要するに外国側から押し付けられた不平等条約をなんとか改正する。できるだけ大きく改正する。一番強烈な破約攘夷論者の主張も安政5年にむすんだ条約を一度解約して、その上で対等な条約を結ぶということなのです。破約攘夷とは鎖国に戻すことではないのです。攘夷を行って本当の開国をするという当時の言葉があります。

勅使に対して将軍家茂が上洛した上で攘夷について策略を申し上げたいと、そういう返答をいたします。衝撃的なのが、このときの返事に将軍家茂が「臣家茂」、天皇の家来だと自らサインをすることです。この段階で朝廷と幕府の位置関係、あるいは天皇と将軍の位置関係がはっきり定まってしまう。朝廷・天皇が上、幕府・将軍は下、家来だと言っているのです。これは注目すべき点があります。さてそうした中で文久3年（1863）1月22日に春嶽が江戸をたちまして、2月4日に入京しております。そして、将軍家茂も3月4日に入京し、3月7日に参内します。禁裏御所の中に入ることを参内と言います。そこで、勅命を受け取ります。天皇の命令です。その内容ですが、要点をあげると、第1点は大政を委任する。政治および軍事を将軍に委任する。実は大政委任というのは朝廷と幕府の間における暗黙の了解だったわけですが、ここで文書でもってはっきりと大政委任を伝えたのであります。そして第2点は、しかしながら全面的に委任したわけではなく、場合によっては朝廷が諸藩に直接命令を出すこともあるということです。幕府は朝廷が諸大名に命令を下すことを禁じていました。それを、朝廷が直接命令することもありうると、そういう表現です。

それから第3点は、攘夷をぜひとも成功させなさい、という命令です。このような勅命は朝廷周辺

の長州藩士等の過激な強硬論者が三条実美らの公家をあおって、公家・朝廷に働きかけてこういう勅命を出させるわけです。この攘夷を成功させなさいという勅命が出された段階で、京都はもう完全に攘夷論が燃え上がるような状況になってしまっているのです。どうしようもない、ほかの意見は通らない、そういう状況になっております。ここで3月9日に、春嶽が家茂に政事総裁職の辞職を申し出ます。要するに、過激な連中が言っているような攘夷の成功などはできっこない、と春嶽は思っています、事実そうなのです。ですから政事総裁職というポストにあっても、とても攘夷論者と一緒になって政治を行えない、彼らを止めることもできない。ですから、とても自分の職責を全うできない、という理由です。そして同時にこのような京都にいたくないというのが本心だったと思いますけれども、辞表を出してしまう。せっかく4年ぶりに復活した非常に重要な幕府のポストなのですけれども、それを投げうってしまうというわけです。

そうした中で3月14日、久光が入京してまいります。これは春嶽を頼って出てきて、春嶽と一緒に朝廷改革しようという目的で、かつ攘夷論者を何とか鎮めたいと思って久光が鹿児島から出てくるのですが、入京してすぐその足で近衛家に行きます。近衛家と島津家は中世以来非常に深い関係にあります。近衛邸へ行ったところ鷹司閔白、朝彦親王それから慶喜、山内容堂らが近衛邸に集まっています。そこで久光は彼らに、攘夷について軽率に決断してはならない、それから攘夷論者、過激な攘夷論者の「暴説」という言葉を久光は使っていますけれども、それに動かされてはならないと強く主張をいたします。ところがこの近衛邸に来ていた朝廷の主脳部ですが、彼らはどちらかというと過激な攘夷論に反対の立場の人です。しかし久光の主張に対して誰も一言も発言しない、みんな黙っている。翌日も同じことを久光が言っております。暴論家に支配されているような京都、朝廷を改めなければならぬ、暴論家の説を信じてはいけないう。ところが翌日もまた黙っている、誰も発言しない。なぜこういう状況になってしまっているかということ、その攘夷強硬論者に脅迫されているのです。自分たちの意見に従わなければ殺すという言葉で投げ文がほうりこまれる。とにかく公家は、なんといえますか武力に弱い。すぐ脅迫に震え上がってしまうのです。そういうこともあって彼らは何も発言できない、要するに久光が出てきても何もできない。こういう状況になってしまっている。ここで3月15日に、慰留されているのだけれども、春嶽が辞表を投げ捨て同様な形で提出し、返事も聞かずに福井に帰国してしまう。さらに3月18日には久光も帰っていく、26日には山内容堂も帰る、さらには27日には宗城も帰国していく。朝廷と京都の正常化のためになんとか動こうと京都に出てきた四賢侯でしたが、何もできないような状況になってしまっているということです。

そうした中で4月20日に家茂が攘夷実行の期日について、5月10日をもって攘夷を執行する、というふうに朝廷に答えまして、その結果として5月11日の早朝、長州藩がみなさん御承知のように下関で外国の商船、最初はアメリカの軍艦ではなくて商船を砲撃する、そういう攘夷を執行しました。しかしながら日本でそういう武力をもって攘夷の行動を示したのは、その長州藩だけだったということです。だから圧倒的多数の大名はそんな強硬な攘夷論というのはほとんど実現不可能だ、そういう理解の仕方だったと思います。

## 2. 元治国是会議（朝議）に出席

元治国是会議といわれる、国是を決定するための会議（朝廷の会議）が開かれまして、春嶽をはじめ四賢侯が出席して、そこで何が行われたかということについてこれから述べていきたいと思えます。その前の段階の話として、文久3年8月18日の政変についてふれておきます。孝明天皇は、一貫して過激な攘夷論者、攘夷論に反対しております。なぜ反対するかというと、過激な攘夷論者の過激な行動は外国と戦争になるということです。外国と戦争になったら日本が負けるということは、天皇はよく分かっております。まともな戦争にもならないということもよく分かっている。だから孝明天皇は過激な攘夷論者に反対しているのです。ただ天皇が一つ強く希望しているのは、全面的な破約攘夷は、それは無理だ、しかし横浜鎖港だけは何とか実現してほしい。つまり日本側の要求を一部でも受け入れてもらいたい、それぐらいの主張はしてもいいではないか、というのが天皇の考え方です。そういうことですので、天皇はなんとかこの「過激な暴論家（強硬な攘夷論者）」を朝廷の政治の場から退けてもらいたいということで、島津久光に上京してそれを実現してほしいという、そういう手紙を書いております。それに動かされて久光が家来に指示をして、自分が出てくるわけにいかないわけですから家来を動かして、さらにそのことを会津藩主松平容保、当時京都守護職です、それから朝彦親王にも相談する。朝彦親王も薩摩の島津家と非常に親しい関係で、実質的に朝彦親王の生活の面倒をみているのは島津家だったわけですが、そういう関係もあって朝彦親王と会津藩を動かして、さらに朝彦親王が天皇に直接計画を説明した結果、天皇が最終的に決断して攘夷強硬論者を京都から排除する政変が行われました。これが文久3年8月18日の政変です。

この政変によって京都を制圧していたような強硬な攘夷論者が京都から一掃されます。そこで強硬論者が主張していたような全面的な破約攘夷ではない、新しい外交方針、新しい国是（国家の基本方針）を決める必要が出てくるわけですから。それを決めるために春嶽らが上京してくるわけですから。この政変の間に春嶽と久光が密接な連絡をとり、上京を約束しあって出てまいります。さらに山内容堂と伊達宗城それから慶喜にも連絡して上京してくる。さらには將軍と老中も上京する。將軍はじめ老中、それから四賢侯、こういう武家の代表となるような人物が京都へ出てくるのは、武家の後押しで自分たちが尽力して、新しい国是を定めようというわけですから。先ほど申しましたけれども、横浜の鎖港、それを実現する。実現するというよりも、もう少しわかりやすく言えば、実現を目指す、です。彼らもほとんどこれは実現が不可能に近いと理解しているのですが、しかし外国側に要求していこうということです。天皇も望んでいるわけだから。そういう内容での新しい国是を国家の基本方針として定めようと、そういう考えで上京してまいります。

要するに努力目標としての横浜鎖港を新しい国是にしようということです。この点は幕府側も慶喜も賛成しております。文久3年の9月から10月にかけての段階で、慶喜と春嶽ら四賢侯の間で、このような約束が取り交わされています。横浜鎖港を努力目標に設定しよう、こういう方針でなんとか朝廷側を説得してこれを新しい国是にしよう、こういう約束のもとで上京しているのです。そしてそのための朝議がこのあと行われるわけですが、その前に春嶽と久光の運動によって、この四公（春嶽・久光・伊達宗城・容堂）と慶喜、さらには松平容保、この6名に朝政参豫が命じられます。参豫の「豫」の字はあえてこの旧活字を使っておりますが、これは「許す」という意味があるので

す。要するに武家に、朝議への参加を許しますと、そういう意味でわざわざこの字を使っているわけです。朝廷主脳部と武家代表。いわば公家と武家の最高首脳会議が開かれることになった。これは日本の歴史始まって以来の画期的な出来事なのです。武家と公家が一緒になって国家の政治方針を決めていくということですから。

将軍をはじめ老中も京都に来ておりますから二条城にも御用部屋というものがありません。御用部屋というのは老中が政治をおこなう場所です。ここには一般の大名など絶対入れません。ところが参豫諸侯が、その非常に重要なことを審議・決定する御用部屋に入室することを許されることになった。これもやはり久光と、特に春嶽が強く要求しまして、要するに自分たちも幕府の政治に参加させなさい、といった要求です。これに対して幕府側はかなり抵抗しますが結局これも許可になる。これは画期的な幕政改革です。幕府の政治に諸侯クラスの間人も加えるということです。このように公家と武家の世界、朝廷と幕府の世界で画期的な改革が行われています。それに春嶽が非常に大きな力を及ぼして、春嶽の発言力でこのような画期的な改革が実現したというわけです。

国是会議は毎日ではなく数日おきに開催されています。その結果として元治元年（1864）2月15日に将軍家茂が、横浜鎖港の実現に努力したいという内容の奉答書を朝廷に提出します。ところがこれに対して朝廷側が曖昧な表現だと言って朝彦親王が慶喜を詰問いたします。努力したいというだけで本当に努力するのか努力しないのか、実現するのかもしれないのか、そこらへんの態度が曖昧だと。朝彦親王は幕府・慶喜が独断でこういう表現の文章を提出したのではないかと考えたわけですが、実はそうではなくて、春嶽も久光も同じ意見だったのです。必ず実現するとは約束できない、ということです。できないことは約束しないほうがいい、だから努力目標としてなんとか実現するようにしたいと、そういう表現になったわけです。ところがそれに対して朝廷側からクレームがついた。結局この後もすったもんだあるわけですが、2月19日に家茂が武家の総意として、横浜鎖港を実現する、と言い切った。実現「したい」じゃなくて実現「する」なんです。こういう文言の奉答書を改めて提出いたします。横浜鎖港を実現すると言い切ったのは慶喜の強い主張によるものであります。これに対して当然春嶽らは反対です。ただしここで春嶽は、この場で幕府と自分たちが喧嘩してはいけない、武家側の内紛になる、それはみっともない、とにかくこの場はとりあえず慶喜の主張を受け入れて横浜鎖港を実現する、という文言の奉答書を提出しておこうと妥協するわけです。

しかしながらこれが新しい国是に決まった。将軍が提出したわけです。これに対して朝廷が非常に喜ぶのです。単純に幕府が約束してくれたということで喜ぶわけですが、これに対して春嶽をはじめ久光は非常に苦い思い、何とっていいかわからないという表現をしています。それでこの時の慶喜の思惑ですが、とにかくこの場では朝廷と幕府の一体化を推進したい、一体化を強化したい、そういう考え方ですね。とにかく天皇が強く望んでいるから、それを受け止めようじゃないかということです。しかしながら最初に四侯と約束していた横浜鎖港を努力目標にするということ、ここで慶喜は勝手に破ったわけです。そしてこの結果春嶽たちは不可能なことを約束する慶喜や幕府と、不可能なことを幕府が約束してくれたと言って単純に喜んでいて朝廷や公家、天皇に非常に失望します。とても彼らとはやっていけないということで、せっかく任命された参豫職を辞職して帰国していくということになってしまいます。それでも、春嶽は幕府・慶喜には不満があるけれども、親

藩そして自分は田安家の出としてやっぱり彼らを見捨てられない、これが春嶽の立場です。幕府や慶喜にも、かなりずけずけと意見や批判を述べ、改革を主張するけれども、武家の内部で大きな対立や喧嘩はしたくないというのが、基本的には春嶽の立場です。穏健な改革論者なのです。しかし、かなりずけずけと言っていることは確かです。これが春嶽の立場ですが、しかし久光と家来たち薩摩藩は、これをきっかけにして幕府離れがすすんでいきます。幕府とはもう一緒にやっているといることです。この元治国是会議までは久光と慶喜がかなり密接な関係をもってやりとりがありますが、これも、これ以降は離れていきます。

### 3. 長州征討勅許をめぐる

それでは「長州征討勅許をめぐる」に移っていききたいと思います。このころ春嶽はほとんど福井におります。しかし福井から薩摩にいろいろメッセージを送っておりまして、薩摩の側もそういう春嶽の発言をやはり頼りにしております。そういう関係であるということをも前もって御承知おきいただきながら具体的に勅許に至る過程、長州征討問題についてこれからお話していききたいと思います。

元治元年（1864）7月19日の禁門の変によって長州藩が朝敵とされ、征討命令が朝廷から出されるわけです。それに対して長州藩は軍事的な対決になる前に、三人の家老が兵をひきつれて上京し、朝廷に向って鉄砲を撃つという、そのような結果になったわけですから、なんらかの処分が必要と判断して、三人の家老に責任を取らせて切腹させます。長州藩はこれでもって謝罪のしるしとしたいという考え方ですし、一般の諸藩もそういう受けとめ方でした。しかしながらそれでは済まない、というのが幕府の立場なのです。もっと厳しく、なんらかの処分をしなければならない。そこで將軍家茂の進発ということになるわけです。

ここで長州藩の動向について一言だけふれおきます。慶応元年（1865）3月、高杉晋作や木戸孝允らの長州藩改革派が藩内抗争を経たうえで長州藩の藩政を掌握します。そして彼らによって「武備恭順」というものが藩論に決定する。要するに表面は恭順の姿勢を保ちながら、幕府に攻られたときのために常に武備（軍事力）の充実に励む、そういう藩の基本方針です。こういう長州藩の方向を幕府側が知る。そこで4月19日、幕府が將軍の進発を布告いたします。進発ですから將軍が幕兵を率いて進軍するということです。

そして閏5月25日に家茂が大坂城に入城する。江戸を出発してから一ヶ月かけて悠々と進軍する。幕府はこういったデモンストレーションをすることによって長州藩は恐れをなして降伏してくるだろうと、そういう非常に甘い見通しだったわけですが、実態は全くそうではなかったということです。このとき4月30日に春嶽が福井から長州征討の非、長州を征討するような戦争をやってはいけないということを幕府に建言しております。つまり春嶽が言う事は、長州を征討する戦争はいわゆる国内戦争・内戦になる。内戦というのは国家を傾ける一番の原因になることだと。実はこれには隣の清国の状況が頭にありまして、文久2、3年まで太平天国の乱という大規模な農民反乱が清国、中国で起こっておりまして、それを清朝政府が自分の力で鎮圧できなくてイギリスの軍事力をかりて、ようやく反乱を鎮圧しております。その結果として清朝は急激に傾いて行きます。すなわち日本が内戦状態になったら中国、隣の清国と同じ道を歩んで同じように国家を傾けることになるということです。

す。そういうことから長州征討戦争をしてはいけないというのが、ほぼこのころ春嶽をはじめとして世論になっております。たとえば大久保利通と西郷隆盛はもっとはっきりと表現しております。この年8月4日の大久保利通の発言ですけれども、幕府は極めて危険な状態にある。薩摩は「割拠」を藩の方針とする。「割拠」というのは幕府から自立するということで、幕府の言うことなんか聞かない、平たく言えば幕府離れを藩の方針とする、そう発言しております。そして重要なのは、これは薩摩だけではなくて日本国内の有力藩もこういう方向を強めていこう、有力藩がみんな幕府離れしていこう、そういう発言をしているということです。そしてその発言のもう一つ先には、そういう幕府離れをした有力藩が提携して、協力し合っただけから日本国家を維持していかなければならないだろうと、そういう発想があります。

それから西郷の発言も紹介しておきたいと思います。西郷は手紙の中で、幕府は「自ら倒れ候儀、疑いなき事に候」と書いております。要するに、幕府はもう倒れる、間もなく倒れる、倒さなくてもいい、自分から倒れていくということです。なぜこういう発言をするかということ、やはり諸藩がほとんど幕府の言うことを聞かない。特に長州征討のために動く藩がいなくなっている、協力しない。そういう現実を踏まえて発言をしていたのです。このような状況になってきて、なんとか諸藩を動員して長州征討の戦争をしたいというのが幕府の考えです。そのために幕府が天皇の勅許を求める。長州征討の勅許です。それが9月20日から翌日にかけての朝議になるわけです。慶喜と松平容保、それから京都所司代・松平定敬が参内しまして、将軍家茂が軍勢を率いて長州に進軍する、そのことの勅許を求めた。なぜここで勅許かといいますと、天皇の命令によって諸藩を動員しようというわけなのです。天皇が勅許するのは幕府の方針を受け入れたことを意味します。天皇も長州征討を望んでいるということで、諸藩をその天皇の勅命でもって動員しようという目論見があるわけです。さて朝議の模様ですけれども夕方から朝議が始まりまして、ちょっとした問題があると必ず徹夜の朝議になり、朝5時過ぎに一応勅許の方針で議了します。この朝廷の会議の模様はすぐリアルタイムで薩摩藩の京都藩邸に報告されております。そこで大久保利通がさっそく、朝議に出席していた朝彦親王と関白二条斉敬に猛烈に抗議に行きます。勅許してはいけないと。

そして夕方から朝議となりますが、ここで慶喜が自分（禁裏御守衛総督）と京都守護職の松平容保、それから京都所司代の松平定敬の三人が辞職する、そういう発言をするのです。要するに、京都の守衛を担当している武家側の三人が京都からもういなくなってしまう、そういう発言なのです。脅迫です。自分たちがいなくなっても構わないのかという。この発言に朝廷側は震え上がってしまいます。理由があるのです。この時に外国側は兵庫、現在の神戸ですが、兵庫の開港を求めて直接朝廷と交渉しようとして大坂湾に軍艦を集結させている。慶喜は大坂湾に集結している彼等がいつ京都に上ってくるかわからない、そういうことを言って脅迫をしているのです。ですから今長州征討の勅許を出してもらえれば、自分が外国の軍艦を大坂湾から退去させることができる、そういう交換条件を出して勅許を求めた。言ってみれば慶喜は恐怖感を煽って、この勅許を引き出したというわけです。そして、その朝議の模様が克明に近衛から大久保に報告される。それを受けて大久保から朝議の様子が薩摩藩庁に手紙で報告されるわけです。

慶喜の脅迫に屈してしまう朝廷の状態。大久保が二条斉敬・朝彦親王のところに行って勅許しては

いけないということを抗議しますが、それに対して関白も朝彦親王もまともな返事ができない、どうしようもなかったと弁解を繰り返すだけだった。そういうことも藩庁に報告する。さらにこの長州征討の勅命は非義の勅命だ、「非義」とは正義でない勅命ということですが、だから従わなくてもいい、諸藩も従わないだろう、こういう内容の手紙（報告書）を藩庁に送っております。そして重要なのは、この手紙の写しを坂本龍馬に持たせて長州に送っていることです。龍馬が長州に行って長州藩の要人と面会しております。これが薩長盟約の出発点になるわけですが、要するに薩摩藩の立場・考え方を龍馬が直接長州藩に伝える。長州藩と薩摩藩はこれから連携していこうではないか。そして有力藩が協力し合わなければ日本という国家の立て直しは難しい。まず長州と薩摩が手を握って、それからさらに有力藩に提携の輪を広げていこうと。それが大久保と西郷の考え方でありました。こうして薩長盟約が慶応2年（1866）1月22日に結ばれます。さて慶応2年6月から第2次の長州征討戦争が始まりますが、協力したのはわずか14藩でほとんどが譜代藩でした。はじめから幕府軍の負け戦、負け色が強くなっておりまして、そうした中で7月20日に将軍家茂が大坂城で亡くなりますけれども、この段階でほとんど幕府の敗北が見えてきております。

こういう状況の中で6月29日に上京しております春嶽が、8月14日に直接慶喜に次のような勸告をしております。天下の大政一切を朝廷に返上するべきである。いわゆる大政奉還の建言を直接慶喜に伝えております。この発言はすぐに広まります。長州でも木戸がこの発言を手に入れて、その写しを龍馬に送っております。ですからあつという間に広く知れ渡ったわけで、それだけ注目されているわけです。そして同じ月に龍馬が越前藩士・下山尚と長崎で会って、このような提言をしております。なんと春嶽公の力で大政奉還を実現してほしい、春嶽公ならそういう風に状況を動かせるだろう、このような龍馬の発言です。また木戸孝允も同じような発言をしております。春嶽が尽力してくれれば大政奉還が実現するかもしれないと。龍馬も木戸も春嶽に非常に大きな期待を寄せております。さらに9月14日の大久保の発言を紹介しておきますけれども、有力諸侯で新政府を創るチャンスなのだから久光に今上京してほしい、そういう手紙を書いております。もっともこういう発言が出てきますけれども、まだ大きな流れにはならなかったということです。

#### 4. 兵庫開港をめぐる朝議に参加

慶応3年（1867）5月23日、兵庫開港をめぐる朝議に春嶽が出席します。この時、久光・容堂・宗城も上京しております。兵庫開港については、孝明天皇がずっと反対してきましたけれども、外国が非常に強く要求することによって対応しなければならなくなった。そこで慶喜が朝議の開催を求めたわけです。春嶽ら四侯はここで長州処分をゆるやかな方向で決着をつけたい、ということです。第2次征長戦争が行われたけれども、まだ長州問題が解決したわけではない。戦争がとりあえず終わったというだけですから、ここでなんとか決着をつけたい、そういう思いで四侯が上京してまいります。そして朝議が開かれる前に春嶽ら四侯は、兵庫開港はもう当然の成り行きなんだ、自分たちも賛成だ、だから將軍慶喜に、自分たちも兵庫開港に朝廷側が折れるようにバックアップする、その代わりにここで長州問題なんとか決着をつけてほしい、そのように申し入れまして、慶喜はわかったと約束をしております。ところが慶喜はその約束を簡単に破ってしまうわけです。これもまた徹夜の朝議となり

ます。幕府としては外国との関係上、もういつまでも兵庫開港をだらだらと先延ばしはできない、外国が強く要求しておりまして、それに対して慶喜はなんとかできるだろうと、すでにそういう発言をしているのです。そういうこともあって、とにかくここで兵庫開港の勅許を出してもらわなければならないということで非常に強硬になります。勅許が出るまで自分は何日でも朝廷から退出しないとまで言っている。その態度を伊達宗城は日記に、「慶喜の態度は朝廷を軽蔑のはなはだしく言語に絶し候」と書いております。よほどひどかったのでしょう。さらに春嶽も、これは春嶽の発言ということで越前藩側の記録にある言葉ですけれども、朝議が「戯場」のようだったと。要するに下々の人間がわいわい騒いでいるような、芝居小屋のようなものだったと表現をしている。これはもうひどい状況だったということを言っているわけです。要するに混乱する朝廷、そして慶喜の剛腕で動かされる朝廷。具体的には朝廷が無能力だということも言っているわけです。

一方慶喜は自分の腕力で朝議を左右している。結局ここで春嶽らが非常に危機感を持ったのは、これでは慶喜の専制政府になってしまうということです。これではよくない。結局朝廷側に政治力がないということと、それをいいことに慶喜が自分の思い通りの政治をしていく。そういう方向が強まったということで強く危機感もちます。そこで春嶽らが痛感したのは、新しい政府が必要だと、そういう意見です。幕府でもない朝廷でもない新しい政府。慶喜が自分の腕力だけで左右できるような政府ではない、全く新しい政府を創ることが必要だ、そういう合意形成がこの朝議の後になされます。これははっきりとした史料があるわけではないのですが、春嶽と宗城がこういう風に発言して国に帰って行ったと、そういう史料があります。薩摩と長州の人間が話し合った場での記録です。そして春嶽と宗城は何かあった時にはすぐ上京すると言っておりますし、四侯の間で新政府に向けてなんらかの合意形成がなされていたことはまず間違いのないと思います。そうした中で新政府の創設、そしてまず具体的には大政奉還論が急浮上してまいります。急がなければならないわけです。そうでなければ慶喜の横暴がますます強まっていくというわけです。

そうした中で薩土盟約が成立いたします。薩摩藩と土佐藩の盟約です。出席メンバーは後藤象二郎、福岡藤次、寺村佐膳、真部栄三郎、これが土佐藩家老クラスの人。薩摩側は小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通、そしてここに龍馬と中岡慎太郎が同席しております。京都の料亭でこの両藩の会合がなされて盟約が結ばれる。それで盟約の内容ですけれども、京都に新政府を創設する。要するに幕府でも朝廷でもない全く新しい政府です。幕府や朝廷を母体としない政府です。そして議会を設置する。これは上下二院制をとるといっています。その下院のところ、庶民も参加してしかも正義純粹の者を選出したいという言葉があります。たぶん龍馬の言葉でしょう。特に「庶民」という言葉は当時、例えば大久保や西郷は衆庶とか民衆、あるいは人民という言葉を使いますが、「庶民」という言葉を用いているのは見たことありませんので、たぶんこの「庶民」という言葉は龍馬の発言だろうと思います。しかも正義純粹の者というのも、大久保や西郷あるいは後藤の発言ではたぶん出てこない言葉で、いかにも龍馬の発言らしいと僕は思っております。ともかくこういう議会・議事堂を設ける、そして將軍職も廃止する、こういう内容です。これを実現するために薩摩と土佐は協力しよう、倒れつくすまでやっつけようという内容のものであります。春嶽、久光、宗城はこの時点でまだ京都におりますから薩土盟約は当然報告されます。春嶽はもちろん承知します。もうすでに容堂は高知へ

帰っていますけれども、春嶽と宗城は8月6日に京都を発っております。薩土盟約の要点はまさに新政府を創設する、この一点です。そのためには大政奉還、将軍職の辞職も当然前提として必要だということです。新政府創設には協力する、そういう動きが強くなったときに、必要と思われるときにはすぐに上京する、そういう言葉を残して春嶽と宗城が帰国しております。そして薩土盟約は8月の初めの段階で長州にも伝えられます。さらには芸州（広島）にも伝えられます。おそらく薩土盟約の内容はこの他の藩にも有力藩には伝えられているのだらうと思います。はっきりと記録はまだ確かめておりませんが、これだけ有力藩に働きかけてオープンにしておりますし、他へ広く話したらいけないということも言うておりませんから、広く伝わっているのだらうと思います。

そして問題は新政府を創設する方法ですけれども、まず土佐と薩摩の考え方では、慶喜に大政奉還をするべきだと建白する。まず建白です。穏健な手段で勧告するということです。そして受け入れられなかった場合は、薩摩と土佐の藩兵を動員して慶喜に圧力をかける。同時に朝廷にも圧力をかける。朝廷も同意しないと新政府は成立しないのです。朝廷と幕府の両方を説得しなければならない、同意させなければならない。そのための圧力として藩兵を動員するということです。それでも状況が動かなかった場合は、薩摩が決断して政変を執行し、一挙に新政府を創設する、これは最悪のケースを考えているわけですが、しかし最悪のケースが現実になったわけです。ともあれ薩摩は8月初めに、こういうことを言うております。新政府をとにかく作る。しかし幕府側の逆襲が考えられる。その新政府を維持するために兵力がさらに必要だということです。そのために薩摩が長州藩に出兵を求めていくわけです。新政府を創設するところまでは薩摩の軍事力でなんとかやる。しかしその新政府を維持する、そして安定させるためにも長州藩の軍事力、その他の藩の軍事力が必要だから協力してほしいということを、大久保利通が直接山口長州藩に行って話をし、さらに芸州藩にも伝える。その結果として薩長芸三藩出兵協定ができるわけですが、この点についてはもう時間がありませんので省略いたします。

そしてこの後の土佐の方針ですが、容堂が最初は出兵に反対するのですが、いざ新政府を創る煮詰まった段階になると、土佐も300人の藩兵を京都に派遣しておりますから、当初は反対だったけれども、最終的には容堂も軍事力を動員して新政府の創設に動いたということになります。

## 5. 王政復古政府（新政府創設）の成立

さて、では最後に王政復古政府、新政府の成立とその過程について、これからお話ししておきたいと思います。まず10月14日に慶喜が大政奉還を上表いたします。その前の10月3日に土佐藩が慶喜に建白を提出して、その建白を採用して、大政奉還を朝廷に申し出たということです。上表というのは天皇に差し上げる文書文章のことです。さらに10月24日、10日後に慶喜が将軍職の辞表も提出しております。ここらへんが慶喜の空気を読むことの巧みさであり、状況が動いていると判断する鋭い感覚です。幕府の情報網があって、自分に対して非常に風当たりが強くなっていることを慶喜はひしひしと感じているわけで、敵から攻撃を受ける前に自ら動こうと、そういう判断でもあったと思います。ところが慶喜の大政奉還の上表と将軍職の辞表に対して朝廷側は対応できない。どういう答えをしたかということ、諸大名が上京するまでとにかく当分政務を委任するといひます。せつかく大政を奉還す

る、お返しいたします、と言ってくれているのに、朝廷は、いやそうではなくてもうちょっとしばらくお願いします、という話です。それから將軍職の辞表は却下します。將軍職というのは国家防衛を担当する最高責任者ということです。日本国家を守るための最高責任者が征夷大將軍。その辞表を却下します。朝廷側にはまったく軍事力はありません。それから諸藩の側がどう動くかわからないから、これはもうやめてくれるなということです。要するに朝廷には国政担当能力がありませんと、自分から告白していることでありますし、国防もできないと白状している。

そうしますと、この段階で朝廷が対応できないわけですから国家の政治、それから国防、これに責任を持って当る人間がいなくなってしまったということです。中心がなくなってしまった。これは大変なことです。国家の危機、日本という国家の危機なのだ、こういう危機意識が非常に強くなった。じゃあどうすればいいのか。やはり新しい政府を創ることが急務だ、もう新政府創設に向かって動かなければならない、緊急事態だ、そういう認識になっていきます。こうして一挙に新政府創設のための動きが早まってゆくわけです。

そうした中で11月8日に春嶽が上京いたします。これは龍馬の力だけではないんですけど、龍馬が福井にやってまいりまして、春嶽に、新政府をつくるために今すぐ上京してほしいと要請し、それを春嶽が受け入れた結果として上京するわけです。そして翌日土佐藩の福岡藤次が京都越前藩邸の春嶽のところに行きまして、新政府構想を具体的に述べています。その内容は摂政二条斉敬と慶喜が政治の中心となる、言ってみれば公家代表と武家代表の二人が政府の中心となる両頭政治。単純に考えてこんなことでうまくいくわけがないんだけど、まあ一種の弥縫策、とりあえずの策としてこういうものを考えているのだらうと思います。これに対して春嶽が強く反対したという形跡もありませんので、まあ春嶽もある程度妥協案としてとりあえず政府はそういう形にしようかと考えていたのかもしれない。さらにこういう構想で薩摩、芸州、尾張、熊本、鳥取、岡山、こういう有力藩に協力を求める。この新政府構想に春嶽が反対しなかったのは、春嶽自身が文久年間あたりから大名会議、有力大名中心ですが、出来るだけ広げたいわけですけども、そういう大名会議でもって国家の政治を担当して行こうではないかと、そういう構想を持っていますから、春嶽の基本線からずれた発想ではないわけです。

そして春嶽がこの構想を受け入れたのは、やはり平和路線だということです。薩摩が考えているような武力を背景とした政変路線ではなくて、平和的な話し合い路線でもって新政府をつくる可能性があるだろう、そういう見通しだと思います。ただし欠点があるのです。大名を集めての政府をつくるということは、いつできるかわからないという非常に大きな欠陥がある。というのは、朝廷が、慶喜が大政奉還と將軍職の辞表を提出したときに、至急上京してほしいという要請をまず有力大名に、そしてまもなく全大名に命令します。すぐ京都に出て来いという天皇・朝廷の命令。ところが諸藩・諸大名はそれに対応しない。京都がものすごい混乱になっていることを知っているわけで、そうした情報が入っているわけですから、今京都に出て行ったらどういうことになるかわからない。大混乱になって何がどうなるかわからないところに、わざわざ出ていくことはまずしない。よほどきちんとはっきりとした目的がある大名でなければ出てきません。そういう状態ですから春嶽が考えている大名会議がいつできるか、いつ実現するか分からない。それまで政府がない、そういう状況が続くわけ

です。国家にとって非常に危険な状態です。

そこで薩摩が動き出します。土佐・越前構想と同時に、薩摩は自分の考えで動き出していきます。実は11月27日に大久保利通が春嶽に呼ばれて京都の越前藩邸で新政府構想を聞かされております。大久保自身は、慶喜と二条の公武両頭体制は基本的に反対なのです。しかし反対だという意見は述べないで、新しい政府をつくることは大賛成だと言っております。しかしながらここで薩摩は、薩摩の動きをしようと決断するわけです。そして11月29日、大久保が正親町三条実愛を説得に行きます。この正親町三条という人物は公家の中でも一番話が分かる人間、改革というものが大事だとわかる人間だということで、評価の高い人物です。まず彼を説得しようとするわけです。新政府をつくることは急務なんだ、これを政変方式でやらなければならない、そして慶喜と二条は政府からまず排除したい。慶喜が入ると、慶喜は非常に能力の高い人間ですから慶喜の政府になってしまう危険性も高いわけです。ですから薩摩はまず当分は慶喜を排除したいというのが本心であります。そして少数の有力藩でまず政府を成立させる。それから徐々に有力大名を加えていけばいい、という発想であります。まず政府をつくるのが大事なんだということです。こうして正親町三条を説得し、言ってみれば武力を背景にして、少々乱暴な方式ですけれども新政府を政変方式で樹立する、これで説得いたします。そして正親町三条は同意する。

その後12月2日に大久保と西郷隆盛が土佐藩の後藤象二郎にこの話を伝えます。そこで後藤象二郎も同意いたします。これは基本線では薩土盟約で新しい政府をつくることというのが盟約の基本方針になっていますから、反対する理由がないわけです。そして12月5日に、大久保が後藤に政変決行の具体的な手順などを詳細に説明する。その後、後藤象二郎が越前藩邸に行って春嶽に相談いたします。こういう政変方式で新しい政府をつくることを我々は考えているわけだけれども、それはどうかと。これに対して春嶽の発言が残っておりまして、史料があります。春嶽は、それでは騒乱にならないかという。「乱階」という言葉を使っておりますけれども、今の言葉で騒乱ですね。そういう政変方式のような乱暴なやり方では騒乱状態になりはしないか、ということは幕府側が黙っていないのではないか、そういうような考え方です。

そして翌日、早速春嶽が慶喜に家来を送って慶喜に報告しております。ただおそらくこの段階で、新政府で慶喜が復権できる、そういう可能性が強いということをたぶん伝えているのだらうと思います。それと同時にこの段階で、慶喜が幕府の復活をもう考えていない、そして慶喜なりにやはり新政府というものを考えているという情報を、たぶん春嶽は手にしている。これは越前藩邸に何回かやってきている慶喜の側近の永井尚志という目付の話から、春嶽が慶喜の本心を読みとっているということです。これは間違いのないと思います。結局基本的な点で新政府の創設なのです。春嶽も最初は平和路線・話し合い路線でと考えていたのだけれども、いつになったら実現するかわからないわけですから、ここで色々不満もあるけれども決断して、薩摩、土佐、越前で12月5日から6日の段階で合意となっている、という風に見ることができると思います。そしてこのことは尾張、それから芸州にも伝えられる。当然長州にも伝えられるわけです。

そして12月9日の王政復古の政変により、政変方式で新政府が成立します。このとき御所の警備に動員された兵力ですけれども、越前が80人藩兵を出している。それから尾張75、薩摩が圧倒的に多く

て720、それから土佐と芸州おのおの70人ほどです。この兵力を見ても、例えばこの王政復古の政変を、武力討幕派が大規模な藩兵を派遣して御所を取り巻いてやったんだと、そういう説が成り立たないことが分かります。たかが1000人ちょっとの人数ですから。しかもこのとき長州藩兵480人ですけど、まだ京都に入っておりません。京都の郊外の光明寺、今の長岡京あたりに留まっておりますから。さらに薩摩の藩兵は3000弱です。薩摩の藩兵動員能力からいって10分の1くらいしか京都に派遣していないのです。

12月9日の午後に新政府を成立させるための会議が開かれます。それが小御所会議。午後の小御所会議、夜の小御所会議と二回あります。午後のは新政府を成立させるための会議です。ここで春嶽が批判的な発言をしております。武家側が5藩では少ない。越前、尾張、薩摩、土佐、芸州、この藩だけで新政府を成立させるわけですが、これでは少ない。やはりもうちょっと多くの有力藩を加えるべきだということを主張している。おそらくそれと同時に春嶽の持論だった大名会議構想というのを述べているのだと思います。具体的な話の内容はあまり詳しくは分かりませんが、ここでもかなりの議論になったと記録にあります。この春嶽の発言をめぐっていろいろと議論になった。しかしながら結局春嶽が妥協したということになると思います。この会議が終わった後に、尽力してほしいと天皇の勅命が出されます。そしてその後で、総裁・議定・参与という政府の中核メンバーについての任命が行われ、こうした手続きを経て新政府が成立した。議論はありましたが、まず新政府が成立した。

そしてこの新政府の最初の会議が小御所で行われる。夜の小御所会議です。議題の第一点は慶喜の大政奉還と将軍職の辞職問題。これは朝廷側が対応しなかったわけで、棚上げになっているのです。慶喜が辞表を提出しただけの段階で、それに対して正式な答えが出されていない。それをこの会議で決着をつけて承認した。これが第一点。第二点が慶喜の辞官・納地問題。これも辞官といっても官位をすべて辞退するわけではなくて、これまで持っていた内大臣を「前内大臣」とする。つまりワンランク下げるといわけです。それから納地問題ですが、これもしかるべきものを朝廷・新政府のために献上するというので、幕府の領地をすべて没収するということではありません。ごく一部のものを、それなりのものを献上するということです。この問題、特に辞官・納地問題で少し議論となりますけれども、ここで山内容堂が爆弾発言をします。

一部の公家が天皇の権威をかりて政権を手中にしたと。つまり薩摩とそれから薩摩と手を結んだ中山忠能と岩倉具視に対する批判なのです。そして山内容堂は慶喜をこの席に加えるべきだと主張いたします。この山内容堂の発言に対して、春嶽もそれに賛成し、ともかく慶喜をやはりこの席に加えるべき、今すぐ加えるべきだとそういう主張をいたしまして、その点をめぐって大変な議論になります。議論の展開は省略しますが、結局結論としては、春嶽と容堂に対して岩倉と大久保が反論して、この四人の間の議論になるわけです。岩倉と大久保が、慶喜が辞官・納地を自ら実行する、こちらから命令するのではなくて、自ら申し出て実行する、そして慶喜が謝罪の態度をちゃんと示したら、要するにけじめをつけてくれたらこの席に加える。今すぐにはできないけれども、慶喜の態度次第では新政府に加える。そういう方針をここで大久保と岩倉が説明をして、結局岩倉と大久保の発言が通ります。

春嶽がそれに同意したわけです。やはり岩倉と大久保の発言のほうが、筋が通っておりますので春嶽としては、妥協せざるを得なかったということになると思います。そしてこの小御所会議の後、春嶽と尾張の徳川慶勝が、翌日慶喜を説得に行きまして、とにかく自発的に辞官・納地を申し出れば政府に復活することができるということを伝えて、それに対して慶喜は同意致します。ところがなかなか慶喜がそれを実行しなかったために結局鳥羽伏見戦争になってしまうわけですが、この点はまた時間がなくなってきたので省略致します。

春嶽には、たぶんかなりの不満が残ったと思いますけれども、妥協した形になり、結局は春嶽が調整役をしたと評価するべきだと思います。対決・対立になって空中分解しないようになんとか会議をまとめていく。これはやはり春嶽の努力の結果だと思います。調整役となった。だから議論となったけれども混乱とならないで会議が収まり決着がついて、結論が出た。つまり春嶽は政府、新政府を成立させるということを最優先にした。不満もあったけれど今は新しい政府を創設することが一番大事なことなのだ、そういう考え方です。そして最初に申し上げた討幕ということになりますけれども、討幕というのは幕府の罪を掲げて、幕府・将軍を滅ぼす、殺す、そういう非常に過激な意味なのです。単なる「倒す」とは違うのです。タイガースがジャイアンツを倒すのとは全然違います。討つ・殺すという。ですから薩摩がもしこれを掲げて、自分たちの理念として行動していたら、まず春嶽は絶対反対したと思います。薩摩に協力などしなかったと思います。薩摩が討幕を掲げていなかったからこそ、越前も、それから尾張も土佐も芸州も協力し、その結果として新政府ができた、そういうことになるかと思えます。

さて最後になりますが、王政復古というのは幕府（将軍）を廃止したこと、そして朝廷の政治組織を廃止したこと、これが王政復古の内容であります。要するに幕府・武家の側と公家の側の最高の政治組織を廃止して、新しい日本の政府、行政府ですが、それを創設したということが王政復古の一番重要な意味になります。それからみなさん、討幕の密勅というものがありますから、これも気になると思いますので簡単に触れておきますが、はっきり言ってこれは「偽勅」、偽物であります。つまり正親町三条と中御門経之とそれから中山忠能の三人が連名で書いた、朝廷側の決意を述べたものと言っていいと思います。そもそもこの討幕の密勅というものは名前が明治になってから付けられたもので、当時は討幕の密勅などという言葉はありません。その密勅の内容ですが、慶喜が孝明天皇の詔を偽った、矯めたと表現して、だからそういうことをしたから討つのであると、こういう文言であります。孝明天皇の意志を裏切って（偽って）やったと。こういう非常に抽象的な罪なのです。

当時、幕府非難の声はまさに嵐のように起こっているわけですが、幕府の罪として二つの大罪がある、そういう理解の仕方です。一つは条約、すなわち安政5年に結んだ不平等条約です。それを勅許なしで、さらには諸大名の意見も無視して幕府が調印したというもの。それからもう一つの罪は世論を無視して第二次征長戦争を行い、社会的な混乱を招き日本を傾けた。これが二大罪とされています。しかしこの二件、条約問題それから長州征討問題、ともに孝明天皇は勅許しているわけです。結局のところ、そうすると慶喜・幕府の罪は天皇の罪にもなってしまうわけですから、この二つの大罪を将軍慶喜だけの罪とすることはできないのです。事実上無理なのです。慶喜の罪は天皇の罪。天皇が許可したことになるわけですから。そして同時に慶喜が大政奉還をした、このことを坂本龍馬

は英断だと大変評価しております。ついで將軍職を辞職して謝罪を表明した、慶喜なりに自分の罪を謝っている、だからなおさらその罪をさらにかかげて討伐、討つということはほとんど不可能な状況になっております。つまり薩摩と長州が、我々は幕府を討つと、討幕を掲げても、誰もものってこないし賛成しない、そういう状況になっていると思います。そういうことがわかっておりますから、最初に申しあげましたように、薩摩は自分たちの行動は討幕ではないと言っているわけです。

さて、最後ですが、まさに調停役、調整役として春嶽は幕末のこの混乱した政局の中で、いろんな意見が対立する中で、非常に貴重な存在だったと思います。春嶽がいなかったらもっとも混迷を深めた政局になっていったと思います。またこの新政府ももうちょっと時間がかかったかもしれない、そんなふうに見えるかと思えます。そして春嶽は開明的な改革論者として発言し、行動してきました。改革論者です。改革を常に主張し、改革しなければならないということを言い続けてきた人です。しかし春嶽は秩序を乱すような改革、あるいは急激な改革に対しては反対なのです。秩序を乱してまで改革を断行するべきではない。現代でいえば小泉さん風にやってはいけない、そういう考え方だと思います。ですから基本的にはちょっと乱暴な言い方をしますが「革命」論者ではない。それに対して薩摩は多少の革命的なことをやってでも今日本を救うにはそれしかない、という考え方です。ですから言ってみれば春嶽のような穏健な改革論者には明治の時代は生きにくかったのではないかと思います。

明治政府は近代化路線を急ぎすぎている感じがします。あまりにも急激だ。これには外国人もびっくりしているわけです。日本は急ぎすぎていると。それほど急激な近代化路線を突っ走っていくわけですが、これは明治10年までです。西南戦争が終わってからは軌道修正をしていきます。明治ゼロ年代は急激な改革断行の時代なのです。そういう中で春嶽は、あまりにも急激な流れの中で違和感をもっていたように見えます。そして廃藩置県前に政治の第一線から退いていきます。しかしながら明治初年政府でも、春嶽のようないわゆる穏健な改革論というのはそれなりの発言力を持ち、大久保利通たちも耳を傾けて、そういう意味で春嶽という人間を抜きにして明治維新を語れないというのが私の考え方です。ですからこれまでの明治維新史の中で春嶽は非常に不当な位置づけをされていると思います。春嶽が具体的に何を言い、どういうことをしてそれが現実の政治の過程でどのように活かされていたかということ、これまであまりきちんと検証してこなかった。これは我々の責任でもありますけれども、これからもう少し春嶽を中心とした明治維新を語っていきたいと思います。少し時間がオーバーしてしまいましたけれども熱心に聞いて頂きましてありがとうございました。